

活気ある職場づくりを目指して (山での対応の中から)

高山営林署 小 田 圭 雄

はじめに

種苗事業は低原価の健苗を育成して次代に立派な森林を残すことにあるが、育苗という比較的地味な作業の中で職場のムードは沈滞しがちであるが、気分転換をはかり、各自の立場や持場で誇りと自覚を持って、納得できる苗木作りをするのが極めて重要なことと考える。

かような職場環境や、作業条件を踏まえ、従来から当事業所では「作業員の主体的参加と自発的な意欲の醸成により、活気に満ちた、やり甲斐のある職場づくり」を第1の目標にして取組んでいるが、長年苗木作りに従事していても、自分達の育てた苗木が山ではどのようにして生育しているのか、山の実態はどうなのか、実際の山の様子が判らなくては、士気も上がらず、意欲も湧いてこないと考える。

今回はS 53、54年に亘って全員が山に目を向け、山に接し、山で体得したことを苗木作りに反映させ、健苗育成意欲の向上を図ってきたことを発表する。

職場づくりの項目

- ◎ 造林地におけるヒノキ苗の植付方法の試み。
- ◎ トウヒまき付据置苗の林地植付とトウヒ造林地の考察。
- ◎ 苗畑女子従業員による山の作業体験。

1. 造林地におけるヒノキ苗の植付方法の試みについて

当所は、ヒノキ苗を主体に年間70万本生産しているが、自分達が手塩にかけて育てた苗木の、造林地での植付の対応と、山が待望している苗木の育苗はどうしたらよいのかということが判らなければ、苗木作りの方向も見定まらず、ひいては意欲も湧いてこないものとする。

そのことから、苗畑作業員の身近に考えてもらえそうな、植付について仮定の問題を提起し、自らの考えや創意で、どのように対応するのかについて試みてみた。

最近では据置養成の大苗が生産されるようになったが、山ではその大苗をどのようにして、植付するのだろうか。という疑問を作業員に投げかけ、通常山で実行されている植付方法で、苗木の生理を疎かにされがちな悪い例を想定し、現地に当てはめて説明したところ、次のようなことが作業員からの疑問点となってあげられた。

- (1) 折角真直に育てた根をどうして曲げて植えるのか。

(2) 根を無理に広げ、座った状態になり、深植となるため初期成長が悪いのではないか。

(3) 根は踏み付けられるため、呼吸困難となって根腐れしないか。

などで、これを究明するため苗畑で行っている床替植付の方法と、造林地における丁寧植（耕耘植栽）の比較を折敷地国有林で試みた。

床替植付の方法は（図1）のようにして、その方法を山に置換えたもので、53年5月実行した。使用苗木は、ヒノキ3年生の据置苗と、2回床替苗を対象とし床替植、丁寧植各24本をサンプルとした。活着は双方共よく、2年目の54年秋の生育状況は同様であるが、上長生長では、僅かではあるが床替植の方が良かった。

（写真1）は床替植、丁寧植の根形を比較したものであるが、植付方法の差がよく表われており、丁寧植の根は側方によく発達しているが、下方の発達に乏しい。床替植の根は下方側方によく発達し根量も多く、今後の旺盛な生長が期待できると思っている。今回はサンプルも少なく、この結果で判断することはできないが、今後の生育を見守る中で、次回の試験を考えている。

この試験を通じて得たことは実際に山に接して、造林サイドに立った育苗が必要であり、厳しい自然環境に適応できる充実した苗木作りの必要性を皆が痛切に感じ取ったことがこの試みの最も大きな収穫であったと認識している。

2. トウヒまき付据置苗の林地植付とトウヒ造林地について

亜高山施業の主要樹種のトウヒを養苗しているが、養苗期間は5～6年と長く、養苗サイクルも悪いうえ、種子の結実周期は8～10年とも言われているが、亜高山施業では早急かつ持続的な供給が必要なことから、まき付据置苗の小さな苗木の内から徐々に山へ出し、トウヒの持続的需要に見合った供給ができないかということから、実際に林地に植付し床替苗との比較をした。

まき付据置3年生苗木、平均苗長9cmの苗木を、折敷地国有林へ150本植付し、植付箇所は、（写真2）のように根株周辺とか、倒木周辺の下刈不要地に植付し、1箇所の植付場所に数本植付した。植付方法は案内棒で穴をあけ、苗木を差込む簡単な方法である。

（写真3）は2年目の育成状況を皆で確認しているところであるが、上長生長しているのがよく判る。（写真4）は2年目の造林した苗木と床替苗を比較したものであり、上長生長は双方とも同様な状態であるが、床替苗は幹も太く、根も充実した苗木であるが、この苗木も山では1～2年位は定着期があるため、上長生長を開始するのは、それ以降と考えられる。造林した苗木は充実度は少ないが、すでに山に定着し、上長生長を開始しているので、今後よく生長するものと推察しているが、苗木自体の養分が床替苗に比べると、造林した苗木は少ないため、今後の生育過程の中で、追肥などの施業も必要になってくるのではないかと思う。また、翌年度床替苗を同じ林地に植付し造林苗との比較を試みたいと思っている。

トウヒ造林地について、今後も引続き造成するためには、樹種の特徴、植える山の地質、地況等を

よく理解をすることが必要なため、皆で折敷地国有林へ見に行ったところ「エゾマツカサブラ」は、天然木に付着していないが、造林木全部に付着しているのは、なぜだろうかという疑問があった。

(写真5)は、S43年植の造林木に付着している状況であるが、造林地全般に付着しており、付着部は芯の部分のために生長が著しく阻害されている。

これらの原因としては、環境条件が大きく影響しているものと思われる。すなわちトウヒを画一的に造林するとカサブラが付着するものと考えられるので、造林は前述のように稚樹のうちに山に定着させ、最初はトウヒを主体とした混交林とするか、あるいは上木等の庇陰した箇所造林し、厳しい自然環境に適応出来るように仕立てることによって病虫害等の被害にかかり難くすることも一つの方法ではないかと考える。

3. 女子作業員による山の作業体験について

山での作業体験を通じ、苗畑作業を外から見直し、苗木作りに反映させようということで、昨年夏に女子従業員を主体に下刈3.26haと、堆肥資材刈取を兼ねた林道の路側の刈払18kmを実行した。

下刈は折敷地国有林の自分達の育てた「スギ、ヒノキ、トウヒ」の補助植込みのしてある天！更新地の下刈で、初めての体験を、皆が額に汗を流し山と取組み、その山に話しかけ、現存する稚樹の保護に細心の注意を配った下刈を実行した。

林道の路側の刈払では、宮林道と折敷地林道で実行し、刈払の傍ら造林地とか、林道、治山の工事現場を見たり、製品生産現場では、伐倒から集材、玉切りまでの一貫工程を初めて見、今までの苗畑作業しか理解していなかったことから、実際に山に接し、山の苦勞も十分理解し、山に対しての疑問も解消され、認識を新たに大変よかったとの皆の評価を得ている。

おわりに

2年間に亘って全員が山に目を向け、山に対し取組んだことを報告したが、これらについて、皆の反省結果を要約すると、「広い視野から山を見、苗畑作業を振返って山で学んだ貴重な体験を事業実行に反映させ、緑を育てることに希望と自信を持って納得できる苗木作りをしよう」と言うように反省がなされている。

私たちが活気に満ちたやり甲斐のある職場づくりを目指して取組んだことを紹介してきたが、今後ともこれらの課題に向って、積極的な取組みを展開していきたいと考えている。

写真-1



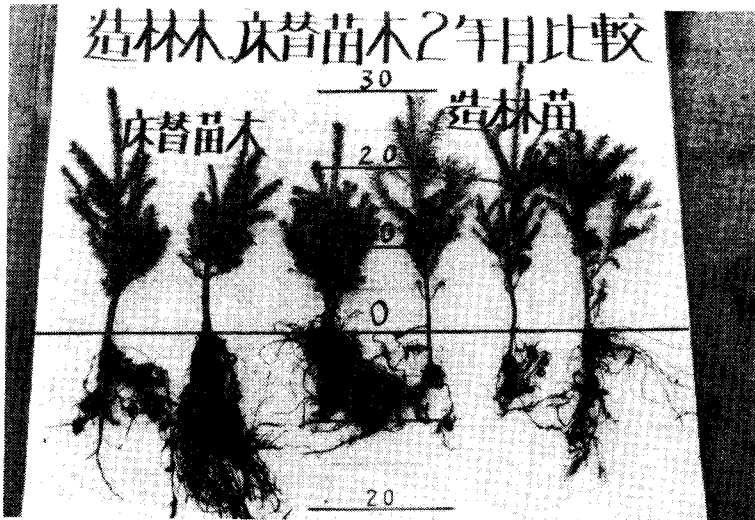
写真-2



写真-3



写真-4



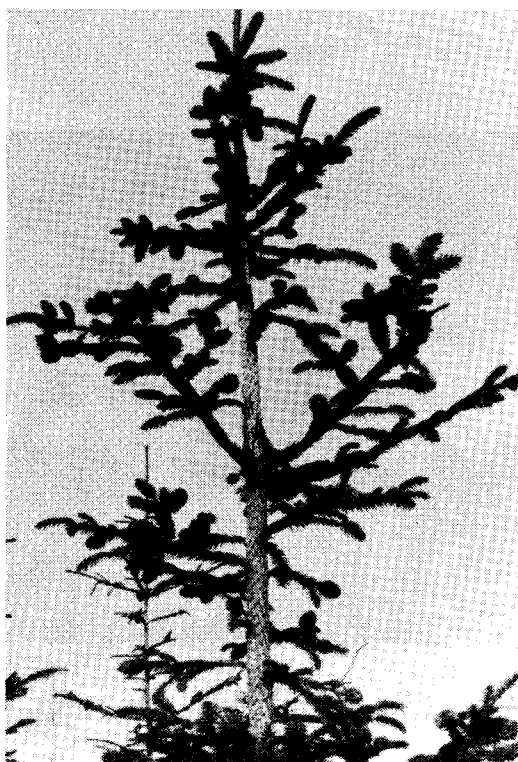


図-1 床替植の方法 (側面)

耕耘		土壌が膝軟になるまで深く充分に耕耘する。
植穴		根の長さに応じて縦に真直な穴を掘る
植付		根を曲げないよう、深植と ならないよう自然な形に (根を曲げると生育が悪く根形も悪い)
押之		あまり固くならないよう手で 押える程度